

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	長井 志保
2. 審査委員	主 査：（鳴門教育大学教授） 前田一平 副主査：（兵庫教育大学教授） 大嶋 浩 委 員：（岡山大学教授） 福永信哲 委 員：（鳴門教育大学教授） 伊東治己 委 員：（鳴門教育大学教授） 村井万里子
3. 論文題目 Assimilation, Sexuality and Racism: Japanese American Nisei Writer Hisaye Yamamoto （同化、セクシュアリティ、人種差別—日系アメリカ人二世作家ヒサエ・ヤマモト—）	
4. 審査結果の要旨  論文提出による学位申請者 長井志保 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。  論文審査日時：平成25年7月20日（土）14時30分～15時30分  場所：鳴門教育大学人文棟3階 第一教員合同研究室  1. 学位論文の構成と概要 <b>Introduction</b> 日系アメリカ人作家ヒサエ・ヤマモトの伝記と作品の相関を確認し、各作品が自伝的性格の強いことを指摘する。そのうえで、ヤマモトの作品の解釈上のテーマとして同化、ジェンダー、セクシュアリティ、強制収容を措定し、いずれのテーマにも通底する問題として人種差別に焦点を当てる。本論はヤマモトの作品や新聞記事に人種差別問題が色濃く影を落としていることを論証するものである。  <b>Chapter 1: Assimilation and Asian American Women</b> 移民にとって重大な問題である同化を社会的経済的地位、言語上の同化、居住集合性、異人種間結婚、人種差別、戦争の影響という観点から検証する。対象となるのはベトナム系アメリカ人 Le Ly Hayslip の自伝 <i>When Heaven and Earth Changed Places</i> とヒサエ・ヤマモトの“ <i>Epithalamium</i> ”。両者の比較により、日系アメリカ人の同化の特殊性を際立たせている。特に以下の議論が注目される。個人主義を旨とする主流アメリカ文化に対して、ベトナム人は家族集合主義が伝統的に強く、それは家族のみならず知人友人にまで及ぶ。よって、Le Ly の場合は主流アメリカ文化には同化せず、ベトナム人の伝統に根差した集合性を志向し、ベトナム文化を維持していると解釈する。さらに、David Leiwei Li が指摘する同化に関わる二つの精神作用 <i>abjection</i> と <i>alienation</i> のうち、Le Ly の場合は <i>alienation</i> の範疇に入ると判断する。一方、ヤマモトや <i>Nisei Daughter</i> の作者である Monica Sone のような日系二世の場合は、Traise Yamamoto がジュリア・クリステヴァを援用して解釈を展開した <i>abjection</i> の範疇に入ると指	

摘する。つまり、日系人二世の場合は、日本文化を棄却（アブジェクト）して、主流アメリカ文化と社会に同化していると結論する。よって、結果的にベトナム系人はディアスポラであり、日系人はモデル・マイノリティになると説く。この研究はベトナム系人との比較という斬新な方法から立ち現れる日系人の特性が、論理的かつ鮮やかに提示されていて、独創性と研究レベルの高さが際立っている。

このような同化論をもとにして、続く“Epithalamium”論では、日系二世の白人社会への同化志向に、強制収容のトラウマの克服としてのカトリック信仰、白人男性との恋愛と結婚、同化のための方策としてのセクシュアリティという具体性を交差させて、同化の困難さを解説する。難解ゆえに研究がほとんどなされていない作品に、本章前半の文化論を効果的に援用して説得力ある解釈を提示している。

## Chapter 2: Sexuality of Japanese Americans

先の章で部分的に言及された同化のための方策としてのセクシュアリティを、本章では明治期の日本で培われた一世たちの家父長的ジェンダー構造からの解放との関係で解明する。対象作品は“Epithalamium”と“The Legend of Miss Sasagawara”である。論拠は Etienne Balibar の言う「人種差別と性差別は共同して機能し、特に人種差別は常に性差別を前提とする」という評言である。日系アメリカ人女性はアメリカ社会で人種差別を受け、日系人社会で性差別を受けた。このような二重差別の状況において、上に示した両作品で描かれる日系二世女性のセクシュアリティは、女性に対して抑圧的に構造化されたジェンダーからの解放として解釈できる、と本論は結論づける。

特に“Epithalamium”においては日系二世女性のセクシュアリティと解放が明確に描かれているとして、再度ジュリア・クリステヴァの「アブジェクション」論を援用して議論を展開する。中心人物の日系二世女性ユキの「平べったい胸」、「平板な茶色い顔」、「*katawa* [原文ママ]として意識される自己蔑視」、「日本文化を継承する日本人コミュニティ」はアブジェクト（忌まわしいもの）として棄却（アブジェクト）される。ユキは自らの日本人性をアブジェクトする。このようなアブジェクションのプロセスは、戦後の日系二世女性が白人主流アメリカ社会へ同化するためのアイデンティティ再構築のプロセスである、という解釈を導く。そして、そのプロセスにセクシュアリティが関与していると論じ、その根底には人種差別とアジア系のステレオタイプに対する抵抗があると指摘する。また、このユキと“The Legend of Miss Sasagawara”のミス・ササガワラには、セクシュアリティを介して同様の強い自己主張があると議論する。

## Chapter 3: Racism

本章は、これまで論じてきた同化、ジェンダー、セクシュアリティ、強制収容というヒサエ・ヤマモト作品のテーマに通底する人種差別を議論の対象とする。特にヤマモトのアフリカ系新聞記者時代に焦点を当て、あるアフリカ系アメリカ人家族に対する人種差別に対して、ジャーナリストとして身を投じて家族を救うことができなかつた無力を痛感していたというヤマモトの伝記を紹介する。その経験が自伝的に描かれた作品“A Fire in Fontana”を引用しながら、ヤマモトの呵責が議論される。また、作品“Eucalyptus”で日系女性が医者から受ける診断“a fear of responsibility”に注目し、作品には描かれていないが、作品分析と伝記的事実の証左を通して、その原因は先のアフリカ系家族を救うことができなかつた呵責、つまり罪悪感ではないかという議論を展開する。これまで論じられたことのない“a fear of responsibility”に着目した極めてオリジナルで説得力をもつ解釈である。

この研究から、特定の人種の立場にとらわれない相対的な人種観と、同時に、社会的地位と経済的差異によって人種上のマイノリティ間に、あるいはマイノリティ内に、さらなる偏見と差別がもたらされるというヤマモトの人種差別観を解説する。本章の後半では、ヤマモトの新聞コラムをテキストとし、そこに表現されたヤマモトの人種差別観を分析する。そこから、人種上のマイノリティ間で人種差別に関する対話が欠如しているというヤマモトの認識を導き出す。つまり、アフリカ系は人種差別を白人対黒人という二項対立でしかとらえず、日系人は白人主流社会に必死に同化しようとしてアフリカ系に差別意識をもっている現状では、互いを理解するための「対話」は不可能であるという認識である。これは文学解釈を越えた優れた文化論、人種論であり、ジャンルを越境あるいは横断する今日の文学研究として非常に優れたオリジナリティ高い研究となっている。

## Conclusion

各章の結論を総括する。

## Works Cited

引用文献

### 2. 審査経過

本論文は人種上のマイノリティの歴史と文化が刷り込まれた文学テキストを如何に読解するかを企図したものである。対象は日系アメリカ人二世作家ヒサエ・ヤマモトの小説と新聞記事である。特に日系を含むアジア系アメリカ文学に特徴的な同化、ジェンダー、セクシュアリティをテーマにして、日系人の歴史に特有の問題である強制収容を交差させ、人種差別問題が顕在化していないようにみえるヤマモト文学に人種差別が色濃く影を落としていることを解説する。研究の歴史が浅く、先行研究も手薄な日系アメリカ人作家の全体像に迫るほどの重厚な文学論と文化論（人種論）が展開されている。

本研究の独創性は、(1) 第1章でベトナム系アメリカ人と日系アメリカ人の同化問題を比較研究し、前者をalienation、後者をabjectionの範疇に峻別し、この文化論を作品“Epithalamium”解釈へと応用し、その方法が成功している点、(2) 第2章において、ジュリア・クリステヴァが提唱し、ツレーズ・ヤマモトが文学研究に適用したabjectionの概念をヒサエ・ヤマモト作品に援用し、日系アメリカ人二世女性にとって、白人主流アメリカ社会へと同化するためのアイデンティティ再構築のプロセスに、セクシュアリティが関与していることを説いた点、(3) 第3章において、作品の中にある“a fear of responsibility”という医師の診断を、ヤマモトの人種差別問題に対する無力感と呵責に原因があるとし、そこからヤマモトの人種差別観を新聞コラムを渉猟することによって解明した点である。以上の独創性と研究レベルの高さは、上記(3)を中心にまとめた論文「日系アメリカ人強制収容と日系二世作家ヒサエ・ヤマモト」（『インターカルチュラル』誌 [日本国際文化学会] 11号, 2013年）が同学会賞である「平野健一郎賞」を受賞したことにもうかがえる。

また、本研究の発展性は、わが国において未だ研究の浅い日系アメリカ文学研究を推進し、広くアジア系アメリカ文学研究への発展が期待できる研究レベルであること、また、それにふさわしい研究能力が確認できる点にある。さらには、文化理解に裏づけられた英文テキストの読解へと実践応用が期待される点である。

本審査委員会では、論文内容において高い評価を受ける一方で、論の展開にやや粗さがあること、フィクションと作家の伝記との峻別が曖昧な部分があること、3つの章の有機的関係性が分かりにくいことなどが指摘された。これらは今後の研究の発展に資する助言として認識された。

### 3. 審査結果

以上により、本審査委員会は長井志保の提出した学位論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。